コラム

派遣武士は存在したのであろうか？

杜　海樹

江戸時代というと、徳川家康、侍、城、年貢･･･等々、次々と言葉が浮かんでくる。しかし、庶民の生活はどうであったのか？　衣食住はどうであったのか？　時の幕府を庶民はどう思っていたのか？　鎖国は評価されていたのか？……と問われてみるとどうであろうか？案外というか、ほとんどわからないのではないだろうか。

実は、江戸時代のことについては、日本の近代史であるにも関わらず、ほとんどわかっていないことが多いようだ。理由は様々あるようだが、幕府から明治政府への急激な政変、関東大震災での焼失、第二次世界大戦での焼失が大きい所のようなのだ。2～300年前のものであれば、通常であれば、文章等もそっくり残っているところなのであろうが、多くが焼けて消え去ってしまっている。

そのため、武士の生活についてもわからない部分が多いという。丁髷に日本刀というサムライのイメージはあっても、藩に所属していた武士が何人で、浪人が何人で、武士と町人の割合が何パーセントで……といったことは皆目わからない。

先日、労働者派遣法の改正案（改悪案）が強行採決されてしまったが、江戸時代において、今で言うところの派遣武士はいたのであろうか？　と比較検討しようと思っても確かめる術が今のところない。しかし、江戸時代に浪人者がいたのは間違いないことであり、今で言う、一時的・臨時的雇用の派遣武士がいなかったとも言い切れない。万一、どこかに派遣武士の置屋のようなものが存在していたとすれば、武士の一時的雇用についてどんな考えがあったのか是非とも聞いてみたいところだ。江戸時代とて、藩の懐事情は厳しいものであり、少しでも倹約、無駄な支出は抑えたいと考えていたであろうから。また、幕府として藩として一時的・臨時的雇用をしないという方針があったなら、その理由を是非とも聞いてみたいところだ。

江戸時代というものの評価は様々あり、これからも様々な分析が出てくるのであろうが、徳川家康という人は、戦国時代の体験と自分自身の長い人質生活から、権力を得た後は、自身の権力を維持しつつ、かつ、戦国の世に戻さないために参勤交代という事実上の人質制度を導入し長期政権安定を図った。そのために、武士は刀を持ち、人を殺めることは可能であっても、戦争を起こすことは事実上不可能であった。江戸時代は鎖国と徳川家の長期支配の下で次第に衰退していくことにはなるが、目指したものは戦のない世であったという面までは否定しない方がよいと思っている。

ヨーロッパにおいても徳川家に近い考えをもった王家があった。それは、ハプスブルグ家だ。神聖ローマ帝国時代から約650年間も王家として君臨し続けた希有な存在だが、そのハプスブルグ家の家訓は「戦争は他家に任せておけ。幸いなオーストリアよ、汝は結婚せよ」であった。ハプスブルグ家は、戦争は何ももたらさないと考え、戦争をしないことで繁栄を築こうとした。そして、事実、政略結婚を重ねながら大繁栄を遂げることになった。しかし、繁栄の一方、憎まれもし、処刑台で最期を遂げることになったハプスブルグ家のマリー・アントワネットはあまりにも有名だ。

21世紀の今日まで、人類は様々な戦争を引き起こし、殺戮を繰り返してきた。しかし、その中において、戦争をしないですむ方法も模索されてきた。ただ、どの方法も一時的に成功したかには見えても、別の問題には注意が向かず、もとの戦争状態に戻ることを余儀なくされてきている。日本国憲法の存在も、道半ばの方法の一つなのかも知れない。だが、そうであるからといって、わざわざ戦争への道を選び直すことはないであろう。

戦争は、突如、戦争として起きるものではない。戦争はあらゆる駄策、あらゆる堕落の結果として起きるものだ。